

書評

高階経和 著

心臓病の診かた・聴きかた・話しかた 症例で学ぶ診断へのアプローチ

東京医科大学教授・循環器内科

山 科 章

筆者が医学部5年生のときに勉強した医学書に、そのころ出版された医学書院のアプローチシリーズがある。高階経和先生の『心臓病へのアプローチ』、本多度夫先生の『神経病へのアプローチ』、天木一太先生の『血液病へのアプローチ』などである。穴埋め形式の問題を解いていくうちに、疾患や病態の理解が進むので大変に役立った。特に『心臓病へのアプローチ』は筆者が循環器を初めて勉強するきっかけになった本でもあり、その著者の高階先生は学生の私にとって憧れであった。その後、筆者が循環器科医となり、先生の講演やセミナーで直にお話を聞く機会があり、先生の“スマートさ”に感激したことをよく覚えている。流暢な英語、豊かな表現力、論理的で理路整然として分かりやすい話の進め方など、学生のころに抱いていたイメージ通りであった。医学生あるいは医学教育関係者なら誰でも知っているシミュレーターの“イチロー”の開発者、あるいはAsian Heart Houseの開設者としても先生は世界中から注目されている。2002年に京都で開催された第26回国際内科学会でも学会場に循環器シミュレーション・ステーションを開設されたが、そのとき以来、筆者は親しくさせていただいており光栄と思っている。

ところで読者の皆さんは、僧帽弁閉鎖不全症(MR)や大動脈弁閉鎖不全(AR)などの患者さんを診察して、心音・心雑音を適切に口(音)で表現できるだろうか。日ごろから、身体所見を大切にし、その所見を正確に表現および記載し、しかもこういった診察法を分かりやすく指導しようという姿勢を持っていないと難しいと思う。ちなみに、MRはDHAAta(ダハータ)、ARはDHATaaaa(ダハッタア)と表現され、こういった心音や心雑音を口まねする方法を心音擬似法(cardiophonetics)という。口まねすることによって、その仕組みが実感できる(本書94-95頁)。そういった心音の表現だけでなく、スプーンを使って心尖拍動を明瞭に見せるなどの魅力的なBSTができるドクターが高階経和先生である。その高階先生が、心臓病診療のあり方をまとめ、『心臓病の診かた・聴きかた・話しかた—症例で学ぶ診断へのアプローチ』として上梓された。5人の仮名の研修医・学生を相手に、症例ベースで指導する形で書かれており、あたかも高階教室の学生になった気分、心臓病の病態や身体所見やアプローチの方法が学んでいける。高階先生の診療の根幹はあとがきにもあるように、臨床で不可欠な三つの言葉(spoken language, body lan-

guage, organ language)を聞き取る姿勢である。私たちは、患者さんの体から発する言葉を軽視しがちである。口から発する日常語だけでなく、表情やジェスチャーなどの身体語や心音・心雑音や呼吸音、心電図所見など臓器が発する言葉(臓器語)も重要である。この三つの言葉を大切にして患者さんにアプローチする。そうすれば心臓病の理解も飛躍的に進み、患者さんのことも分かるようになる。そういった先生の信念が12の章にまとめられている。それぞれの章は症例ベースのPBL(problem based learning)形式で書かれ、随所に気配りがなされている。例えば、左ページと右ページは独立しており、左ページでは患者の問題点、診かた、考えかた、アプローチの方法が、右ページには関連した知識、データ、アドバイス、あるいは解説が記載されている。PBLのproblems, hypothesis, need to knowを左ページに、learning issueを右ページにという感じである。胸痛、高血圧、弁膜症、心筋症、先天性心疾患、虚血性心疾患、心不全、不整脈などの代表的な心臓病だけでなく、心臓神経症、生活習慣病なども、病態をまず理解し、どう考えて、どうアプローチすべきかが書かれている。学生、研修医だけでなく、循環器領域の指導的立場にある方々に、ぜひ読んでいただきたい。高階イズムが体感でき、心臓病診療の原点に戻る良いチャンスになるはずである。

[B5 頁232 2008年 定価
5,040円(本体4,800円+税5%) 医学書院刊]